

愛知県における児童問題史文献目録

愛知教育大学 小川 英彦

1、はじめに

筆者はこれまでたとえば、日本社会福祉学会において「戦前における『障害者福祉』関係文献目録」(『社会福祉学』第32-1号、pp.191-219、1991年)、社会事業史学会において「わが国における治療教育学説史の動向」(『社会事業史研究』第19号、pp.133-147、1991年)などを報告してきた。

先駆的教育福祉機関においては当時の文献・史資料が保存されているところがある。(代表的なのは1891年わが国最初の知的障害児施設の滝乃川学園の資料室)それは、アーカイブスの運営である。昨今、保存された貴重なものを整理報告していく作業が進められつつある。(2005年からの日本特殊教育学会の自主シンポジウムの継続報告など)また、そうした機関ではないものの、大学や市町村の図書館・資料室などにおいて貴重な史資料が残されていることも稀ではない。

こうした研究動向をふまえて、筆者が長年愛知県での教育と福祉実践に関係してきたこと、地域史研究を継続してきたことから、愛知県を対象にし文献目録を整理した。対象とする児童によって研究の境界線をどこに置くかということがあるが、なるべく多くの対象児を検討しないと愛知県の児童問題史研究全体が狭くなってしまうので、今回は広く扱うことにした。広範で児童対象を扱うことは、今日的な「特別なニーズをもつ子どもたち」という捉え方に合致すると考えられるからである。

2、本文献目録で対象とする史資料

筆者は、戦前からの歴史研究を進めるという課題をもっているので、本稿では次の(1)から(4)の昭和に執筆・刊行されたものを対象とした。そして、(1)行政関係物(要覧、事業概要など)、(2)施設、学校などの機関からの刊行関係物、(3)教育会、委員会、協会、研究所などの関係物、(4)当時に書かれた論文、文献、(5)愛知県を対象に報告された歴史研究論文、文献と5つのカテゴリーに分けて執筆年順に概要を紹介した。紙幅の関係上概要のみの記述であるが、文献の出所を明確にしておいた。なお、これらの文献は筆者の研究室に保管されている。「教育福祉」「ライフステージ」というキーワード(研究視点)から福祉分野に留まるのではなく教育分野も含めて、乳幼児期から学齢期における障害問題、非行問題、貧困問題、保育問題を念頭に置いて整理した。

3、史資料の一覧

(1) 行政関係物

『愛知県社会事業年報』(1926:1)は1925年度から継続的に刊行されており、①児童研究並に保護監督機関(児童研究所、児童鑑別所、児童保護員制度)、②貧児教育事業、③異常児保護施設(盲啞教育、不具者教育、感化事業)を紹介している。『名古屋市小学校各部共用研究発表要録』(1926:2)には個別学級のひとつである菅原小学校の鶴見春雄の「算術科に於ける成績不良児童の研究と其救済」と題する実践報告が所収されている。同じ市役所教育課から『名古屋市高等小学校公民教育教授資料』(1926:3)が出され、社会事業として職業紹介所、愛知育児院、愛知学園、託児所、養老院、共同宿

泊所がまとめられている。『名古屋市私営社会事業概要』（1928:4）には①愛知育児院、②名古屋養育院、③愛知学園出園生後援会、④県立愛知学園、⑤愛知県児童研究所の概要がそれぞれ紹介されている。『愛知県社会事業年報』（1931:5）は異常児保護事業の中で、盲啞教育と感化教育を取り上げ後者では愛知学園の入退院の状況や入院当時の教育程度の資料がのっている。『郷土研究概観大名古屋』（1933:6）の社会事業では5つの施設について私設社会事業の助成を散見することができる。『昭和8年度小学校研究発表要項』（1934:7）には劣等児指導に関して俵、下奥、共立、幅下の各尋常小学校の実践報告が記述されている。『児童保護事業綱要』（1935:8）は1934年に日本少年教護協会が第5回児童保護事業講習会を名古屋市で開催したときの講義内容である。注目できるのは著名な医学者である杉田直樹の「保護児童の医学的考察」、佐々木鶴二の「保護児童の体質」、児玉昌の「精神薄弱の原因と対策」が紹介されている点である。『愛知県方面委員執務必携』（1937:9）からは愛知学園の1937年現在の在籍状況（145名、9歳から17歳までの在籍児）がわかる。『愛知県史第四巻』（1940:10）は社会事業として①総説、②救護事業、③経済的福利事業、④労働保護事業、⑤児童保護事業（乳幼児並に母性保護施設、託児所、貧児教育施設、感化教育施設、児童保健施設）、⑥保健救療事業、⑦一般社会事業に分けて詳細に述べている。『全国社会事業施設要覧』（1949:11）は1948年6月以降の資料に基づき①児童保護事業（母子保護、乳児保護、保育、育児、虚弱児保護）、②少年教護並少年保護、③隣保事業を報告している。『大正昭和名古屋市史』は第6巻（1954:12）に校園教育と社会教育について、名古屋市事務報告、名古屋市公報、名古屋市統計書、名古屋市教育概要をもとに記述している。同史第8巻（1955:13）に児童保護施設について児童の保健、児童の養護、特殊児童の保護（貧児、不良少年、異常児）を、名古屋市社会事業概要、名古屋市学事要覧、名古屋市私営社会事業概要、名古屋市史政治編第三、愛知県社会事業概要、愛知県社会事業年報、愛知県史第四巻などをもとに整理している。『名古屋市における社会福祉事業概要』（1955:14）は児童福祉事業として①保育事業、②母子福祉事業、③問題児の保護、④子供会の育成、⑤その他をあげている。名古屋市民生局は『民生事業概要』（1958:15）を各年度に報告しているが、児童福祉機関として①児童福祉審議会、②児童相談所、③社会福祉事務所、④児童福祉司、⑤児童委員を、要保護児童の対策として①養護事業、②保育事業、③ぐ犯少年及び非行少年、④長期欠席児童の項目をたてている。『名古屋市の民生事業』（1958:16）では1957年から1958年の名古屋市所管の施設状況をみる事ができる。『名古屋市の民生委員40年のあゆみ』（1963:17）においては1946年から1947年にかけての名古屋市厚生事業概要からの保護施設収容者調がまとめられている。さらに、名古屋市は『民生事業のあらまし』（1969:18）を各年度に報告しているが、①児童福祉、②母子福祉、③老人福祉、④精神薄弱者福祉、⑤身体障害者福祉、⑥生活保護のカテゴリーになっている。『なごやの福祉』（1974:19）には50年前の社会福祉、戦後の歩みと変遷があり、次に①生活保護、②児童の福祉、③身体障害者の福祉、④精神薄弱者の福祉、⑤老人の福祉ごとに施設紹介がある。『児童相談所40年のあゆみ』（1988:20）では1927年から1987年までの資料一覧とともに、1945年から1988年までの児童相談所と全国・愛知県の児童保護の長期にわたる動向が整理されている。

(2) 施設、学校などの機関からの刊行関係物

『感化教育の栞』（1930:21）には愛知学園内に設置されていた愛知県児童保護会の規約、愛知学園教育施設一班の組織図が記されている。特に組織図では特別学級（一ノ組）の存在が確認でき貴重なものである。『教護児童の研究』（1936:22）には医学者として中心的立場になっていた佐々木鶴二、岸本鎌一が愛知学園の児童を対象に身体的・精神的・社会的方面について医学的立場から詳細に調査

考究している。『学園のあゆみ』(1951:23)は名古屋市本宿郊外学園の開園からの5年の歩みを、生活(衣食住)の充実期、教育内容の充実期、生産教育についてと職業指導施設の充実期に区分している。『この子らに希望を』(1966:24)、『子どもは何を望んでいるか』(1976:25)、『力強い障害児の育成』(1981:26)はいずれも藤田貞男の名古屋養護学校を中心とした実践記録である。『愛知学園年報』(1969:27)は1909年から1934年までの収容人数調、退園者数調、退園時の状況を逐次報告している。また、同年報(1974:28)ではむかしといまと題して学園の経緯を知ることができるし、『創立七十年記念誌』(1979:29)も刊行されている。『名古屋をつなぐ親たち』(1973:1983:30)の創立20年と30年記念特別号が刊行されている。『坂道をのぼる子ら』(1983:31)は母子通園施設の草分けであるさわらび園に通う母親の手記、母親グループカウンセリング逐語録、医学者である堀要の発達と成熟という論文が掲載されている。『愛知育児院百年記念風の中の子ら』(1987:32)は1986年5月から12月にかけて中日新聞に連載された40編と南山寮前身時代の愛知育児院の記録がある。

(3) 教育会、委員会、協会、研究所などの関係物

『愛知県児童研究所紀要』(1925:33)は1925年より刊行されているが、第3輯までは①調査研究(丸山良二による)、②児童保護、③解説評論、④雑録彙報から、第6輯までは①心理学的研究(石川七五三二による)、②医学的研究(佐々木鶴二による)、③調査及保護、④雑報及紹介から構成されている。当時の児童問題を広範に知ることができる意義がある。『感化教育第18号』(1930:34)は感化法発布30年記念事業と出されているが、内容は先述した『感化教育の栞』と全く同じである。『第四回大谷派少年保護事業講習会講演集』(1933:35)には大石三良(愛知県社会主事)、浅野靈麟(愛知学園長)、杉田直樹(名古屋医科大学教授及び八事少年寮長)の論文が所収されている。『愛知県教育要覧』(1949:36)では特殊教育として①盲、ろう学校、②特殊学級を紹介しているが、精神薄弱児は愛知県全学齢児の2.5%にあたるとして当時の状況を伝えている。『特殊教育事例研究集録』(1954:37)は1953年市制地域の就学猶予免除申請者に対する認可数を報告しているが、その中で身体虚弱関係として大府小中学校大府荘分校、名古屋市立武豊学童保養園、精神薄弱関係として名古屋市立八事小学校、川名中学校の障害児の受入れにふれている。『伊勢湾台風災害誌』(1961:38)においては被災孤児等福祉活動、臨時保育所の開設、被災児童の慰問が述べられている。『愛知県郷土資料総合目録』(1964:39)は愛知教育をはじめ多くの教育関係誌や学校沿革などを所蔵している図書館・大学名を整理している点で興味深い記述となっている。『愛知県戦後教育史年表』(1965:40)は戦後の愛知の教育を3つに時期区分して記述しているが、年表作成のために使用した約20の基礎資料があげられている点が特筆できる。『愛知特殊教育10年のあゆみ』(1966:41)では精神薄弱教育10年として歴史、研究活動の実際、関係諸団体の活動と3部から成っているが、名古屋大学グループの研究活動も紹介されている。また、『愛知県教育史』(1973:42)が3巻刊行され、地方教育史として『大府教育史』(1973:43)も刊行されている。『愛知県特殊教育の歩み』(1977:44)は戦前と戦後の歴史を整理する際に活用した参考文献を20ほど紹介していて、かなりまとまった内容となっている。『名養連のあゆみ』(1977:45)では沿革、功労者(青山衝天、鈴木修学、杉本善教、能登芳隆、椎尾弁匡、長谷川秀和)、活動状況、事例発表、資料をまとめている。『児童相談所創立20年誌』(1977:46)では名古屋市の1957年から1976年までの通園施設の在園児の推移、当時の心身障害児の早期療育のあり方を知ることができる。『あいちの特殊教育』(1978:47)はわが国での障害児教育100年を記念してのパンフレットである。『名古屋の子どもたち』(1980:48)においては名古屋の子どもの問題状況として①養護に欠ける子、②障害をもつ子、③子どもの非行について記されている。『名響八十年史』(1981:49)

は愛知県立名古屋聾学校の80年の歩み、回顧、現況、展望を詳述しているが、同書を作るにあたっての参考文献目録が末尾に整理されているのに注目できる。『愛知の福祉』（1987:50）は総論、各論、回顧と展望、資料から愛知県社会福祉協議会35年の歴史をまとめている。『愛知県特殊教育のあゆみ』（1989:51）では1979年実施の養護学校義務制以降の歴史を詳しく記述しているが、愛知県教育委員会と名古屋市教育委員会の関係文献一覧が掲載されている。『愛知県教育史資料編近代二』（1989:52）には特殊教育として拾石訓啞義塾、私立豊橋盲啞学校、私立名古屋盲啞学校、愛知学園の規則、平面略図、生徒調査一覧といった貴重なものが整理されている。『月刊刑政』（1955:53）からは愛知少年院、豊ヶ岡農工学院、瀬戸少年院の概要をうかがえる。『中部矯正』（1970:54）からは豊ヶ岡農工学院、宮川少年院、瀬戸少年院、豊浦医療少年院、名古屋少年鑑別所の概要をうかがえる。

(4) 当時に書かれた論文、文献

丸山（1929:55）は1925年から1928年にかけて児童鑑別所で調査した子どもの状況10項目の結果を報告している。たとえば、愛知学園児童の知能について最下智12.3%、下智24.7%、平均智下39.7%となっている。また、丸山は同じ内容であるが『教育心理学』（1933、56）と『少年保護』（1938:57）でも論じている。二村（1931:58）は愛知学園の家族舎を個別的な保護・教育・治療を促す目的から健常児と精神薄弱児の部屋を区別したと述べている。また、二村（1934:59）は愛知学園の生徒を対象にした調査を行い例えば知能指数90以下が約66%をしめるとしている。尾瀬（1934:60）は津島共存園、西尾隣保館、一里山隣保館の現状にふれている。加藤（1938:61）は豊ヶ岡可塑園の現状を報告している。同様な現状報告が上田（1938:62）により豊浦少年療養所についてなされている。『精神遅滞児教育の実際』（1949:63）では戦後初期に全国的に先駆的に創設された代表校の一つとして名古屋市旭白壁小学校のカリキュラムが所収されている。半田市立成岩小学校（1953:64）は特殊教育指定校として名古屋大学の堀、村上の両先生の協力のもと通常学級での学業不振児への指導を報告している。川本（1954:65）はろう教育の革新への貢献として名古屋市立盲啞学校と西川吉之助をあげている。被災学生を守る会（1960:66）は伊勢湾台風での学生救援活動の記録をまとめている。小林（1973:67）は田中義那が1935年に設立した豊浦医療少年院の院史を整理している。青山（1973:68）は終戦前と後の児童福祉施設一覧、終戦直後の浮浪児の実態を愛知県立鷹羽寮の実態を通して述べている。

(5) 愛知県を対象に報告された歴史研究論文、文献

吉田（1956:69）は愛知の施設史研究の草創として愛知育児院の実態を5つの点から論じている。吉川（1966:70）は司法保護の先人と称される加藤清之助に焦点をあてた人物史研究を試みている。有坂（1966:71）は愛知県統計書、愛知県統計年鑑の行政資料、西尾幼稚園や古知野二葉保育所の史料を使って愛知の保育所・幼稚園の歴史を取り上げている。昭和39年度児童福祉実習グループ（1966:72）は八事少年寮、明德少年宛、衆善会乳児院などの状況をまとめている。三上・吉田（1968:73）は愛知県社会事業一覧、警友、新愛知新聞、名古屋新聞を資料として王子、平野の部落問題を研究している。田中（1969:74）は愛知県教育会雑誌、愛知県広報などの資料を使って熊木直太郎の碧海小垣江小学校、富田悦三の渥美郡大草小学校の子守教育の実践を明らかにしている。宇治谷・近藤・吉田（1969:75）は①愛知県の児童福祉施設の歴史、②昭徳会とその経営する養護施設、③精神薄弱児施設八事少年寮について詳述しているが、執筆にあたっての参考文献、三上孝基らの関係者の聴取もあげられているのが特筆できる。名古屋市立大学医学部神経精神医学教室（1969:76）は岸本謙一の略歴と業績一覧をまとめている岸本の愛知県で果たした役割を知ることができる。吉田・高司

(1971:77) は愛知県議会史、愛知県史、名古屋市の市庁文書を丹念に調査して明治期の社会事業史をまとめている。さらに吉田・高司 (1972:78) は継続研究として大正期の社会事業史も作成している。高橋 (1975:79) は大阪救済事業研究会の『救済研究』と名古屋新聞を資料として愛知県救済協会の設立過程を述べている。また、高橋 (1976:80) は各種の資料を工夫して明治期と大正期を対象として児童保護及び関連事項と一般事項から年表を作っている。竹内 (1976:81) は昭和初期の社会事業の状況を概観している。三上 (1979:82) は愛知育児院を取り上げ明治初期から第二次大戦までの約70年間の歴史にふれているが、愛知育児院日記抄と森井清八の自伝的履歴書を紹介しているのが注目に値できよう。三上 (1980:83) は①育児事業、②盲啞教育、③感化事業 (教護)、④保育事業、⑤その他の児童保護施設の観点から明治及び大正期の児童保護問題を検討している。高橋 (1980:84) は三河育児院の院則、西尾市史編纂室からの関係資料から三河育児院の実態を明確にしている。永岡 (1980:85) は1925年から1931年に刊行された愛知社会事業協会機関誌『共存』の特徴を述べている。精神薄弱問題史研究会 (1980:86) は愛知に関係のある杉田直樹 (八事少年寮長) と児玉昌 (愛知病院長) を人物史研究で取り上げている。三上 (1981:87) は1922年から1960年間で自伝的記述で回顧している。社会福祉調査研究会 (1983:88) は乳幼児死亡、保育、児童保護、貧児保護、感化などの児童問題と障害問題を対象とした愛知と名古屋での調査一覧を掲げている。中田 (1985:89) は戦時体制下の女性の労働と保育問題を取り上げているが、1921年から1945年の名古屋市立保育所年譜が整理されている。遠藤 (1987:90) は虚弱児養護学園である野間、武豊、本宿、横須賀郊外学園について調べている。田代・菊池 (1989:91) は愛知に関係のある森井清八、青山衝天、加藤清之助、三上孝基について人物史研究から述べているが、いくつかの参考文献が掲げられている。長谷川 (1990:92) は養護施設の変遷、学校併設養護施設の変遷を論じている。小川 (1990:93) は八事少年寮長である杉田直樹の治療教育思想をまとめている。浦崎 (1990:94) は名古屋市における障害児保育の変遷、制度、問題点について言及している。高橋・小川 (1991:95) は名古屋市役所教育課や愛知県教育会の『愛知教育』の資料より戦前に創設された個別学級の実態 (知能指数やカリキュラムなど) を明らかにしている。小川 (1993:96) は愛知県児童研究所の役割を明らかにしている。また、小川 (1993:97) は昭和20年代に開設された精神薄弱児学級を①成立過程、②教育内容、③抱えた問題点から比較検討している。前田 (1996:98) は1926年から1941年までに開催された教員養成講習会の役割について名古屋聾学校所蔵関係文書、『口話式聾教育』、『聾口話教育』を資料として詳細にまとめている。川崎、森島 (1997:99) は川崎昂の特殊学級 (名古屋市立菊井中学校) 時代、無認可作業所時代、ひかり学園時代の実践をまとめている。また、川崎、星野 (1998:100) は実践活動に関する資料と面接調査からの資料をもとに川崎昂の教育思想を発表している。小川 (1998:101) は戦前から戦後初期にかけて知的障害問題の成立をめぐる学級と施設の成立要因と展開、実践相互の関係を明らかにしている。山崎 (1998:102) は名古屋大学大学院教育学研究科の修士論文「戦前期治療教育思想の研究—杉田直樹を中心に—」の労作のあと、名古屋医科大学就任前後の様子や名古屋における杉田の活躍についてまとめている。また、山崎 (1999:103) は①杉田の治療教育思想の形成要因、②八事少年寮開設の要因、③杉田の障害児問題解決についても論及している。長谷川 (2000:104) は愛知県の27の児童養護施設を対象として設立経緯にふれている。宍戸 (2002:105) は名古屋保育問題研究会と愛知県保育問題研究会の歩みについて①1960年代、②1970年代から1990年代に区分して総括している。清原、豊田、原、井深 (2003:106) は昭和20年代と30年代の名古屋市の幼稚園と保育所の保育記録から実際をまとめている。後藤 (2005:107) は児玉昌の略年譜と業績一覧を整理している。西山、秦、宇治谷 (2005:108) は①鈴木修学とその教団、②鈴木修学の実践福祉、③鈴木修学と

仏教福祉について論述している。酒井（2007:109）は名古屋市保育所の統合保育の歴史をふり返ることとで、障害児保育制度の発展過程と課題について明確にしている。

4、おわりに

今回の作業を進めるにつれ、史資料の本文に記載されている文献名、引用・参考文献名を知ることができた。筆者が入手できたものは文献目録に所収したが、未入手のものもまだある。これらの文献目録作成は今後の報告としたい。そして、愛知県で尽力した人物史研究を総合的にまとめる作業につなげたい。リポジトリ化されているこの『幼児教育研究』を仲立ちにこうした文献が多くの方々の目にふれ、少しでも愛知県の児童問題史研究の発展に寄与できればと考えている。

文献

- 1、 愛知県社会課『愛知県社会事業年報』（1925年度—1929年度）。
- 2、 名古屋市役所教育課『名古屋市小学校各部共用研究発表要録』（1926年）。
- 3、 名古屋市役所教育課『名古屋市高等小学校公民教育教授資料』（1926年）。
- 4、 名古屋市社会部『名古屋市私営社会事業概要』（1928年）。
- 5、 愛知県学務部社会課『愛知県社会事業年報』（1931年）。
- 6、 名古屋市教育会『郷土研究概観大名古屋』（1933年）。
- 7、 名古屋市教育部『昭和8年度小学校研究発表要項』（1934年）。
- 8、 愛知県児童保護会『児童保護事業綱要』（1935年）。
- 9、 愛知県社会課『愛知県方面委員執務必携』（1937年）。
- 10、 愛知県『愛知県史第四巻』（1940年）。
- 11、 日本社会事業協会社会事業研究所『全国社会事業施設要覧』（1949年）。
- 12、 名古屋市役所『大正昭和名古屋市史』第6巻（1954年）。
- 13、 同上 第8巻（1955年）。
- 14、 名古屋市民生局『名古屋市における社会福祉事業概要』（1955年）。
- 15、 名古屋市民生局『民生事業概要』（1958年度—1968年度）。
- 16、 名古屋市民生局『名古屋市の民生事業—現況の検討と反省—』（1958年）。
- 17、 名古屋市『名古屋市の民生委員40年のあゆみ』（1963年）。
- 18、 名古屋市『民生事業のあらまし』（1969年度—1986年度）。
- 19、 名古屋市民生局『なごやの福祉』（1974年）。
- 20、 愛知県『児童相談所40年のあゆみ』（1988年）。
- 21、 愛知学園『感化教育の栞』（附愛知学園教育施設概要）（1930年）。
- 22、 愛知学園『教護児童の研究』（1936年）。
- 23、 名古屋市本宿郊外学園『学園のあゆみ』（1951年）。
- 24、 藤田貞男『この子らに希望を一手足の不自由な子ら—』（1966年）。
- 25、 藤田貞男『子どもは何を望んでいるか—障害とたたかっている子ら—』（1976年）。
- 26、 藤田貞男『力強い障害児の育成—心の蕾を開かせよう—』（1981年）。
- 27、 愛知学園『愛知学園年報』（1969年）。
- 28、 愛知学園『愛知学園年報』（1984年）。
- 29、 愛知学園『創立七十年記念誌』（1979年）。
- 30、 名古屋手をつなぐ親の会『名古屋てをつなぐ親たち』（1973年、1983年）。
- 31、 さわび園『坂道をのぼる子ら』（1983年）。
- 32、 愛知育児院『愛知育児院百年記録風の中の子ら』（1987年）。
- 33、 愛知県児童研究所『愛知県児童研究所紀要』（1925年—1931年）。
- 34、 日本感化教育会『感化教育第18号感化法発布30年記念号 下』（1930年）。
- 35、 真宗大谷派宗教所社会課『第四回大谷派少年保護事業講習会講演集』（1933年）。
- 36、 愛知県教育委員会『愛知県教育要覧』（1949年）。
- 37、 愛知県教育委員会『特殊教育事例研究集録—第二集—』（1954年）。

- 38、 名古屋市『伊勢湾台風災害誌』(1961年)。
- 39、 愛知図書館協会『愛知県郷土資料総合目録』(1964年)。
- 40、 愛知県科学教育センター『愛知県戦後教育史年表』(1965年)。
- 41、 愛知県特殊教育研究協議会『愛知特殊教育10年のあゆみ』(1966年)。
- 42、 愛知県教育委員会『愛知県教育史』第一巻、第二巻、第三巻(1973年)。
- 43、 大府教育史編さん委員会『大府教育史』(1973年)。
- 44、 愛知県特殊教育の歩み編集委員会『愛知県特殊教育の歩み』(1977年)。
- 45、 名古屋市児童養護連絡協議会『名養連のあゆみ』(1977年)。
- 46、 名古屋市児童福祉センター『児童相談所創立20年誌』(1977年)。
- 47、 愛知県特殊教育百年記念会『あいちの特殊教育』(1978年)。
- 48、 名古屋市児童問題懇談会『名古屋の子どもたち—その現状と将来を考える』(1980年)。
- 49、 愛知県立名古屋聾学校『名聾八十年史』(1981年)。
- 50、 愛知県社会福祉協議会『愛知の福祉—愛知県社会福祉協議会三十五年史—』(1987年)。
- 51、 愛知県特殊教育推進連盟『愛知県特殊教育のあゆみ—養護学校教育の義務制以降—』(1989年)。
- 52、 愛知県教育委員会『愛知県教育史資料編近代二』(1989年)。
- 53、 矯正協会『月刊刑政』第66巻第10号(1955年)、第67巻第9号(1956年)、第71巻第7号(1960年)。
- 54、 名古屋矯正管区『中部矯正』第2巻第3号(1970年)、第6巻第1号、第3号(1974年)。
- 55、 丸山良二「不良児童の調査」(『教育心理研究』、第4巻4号、1929年)。
- 56、 丸山良二『教育心理学』、建文館、(1933年)。
- 57、 丸山良二「問題の子供はどこに居るか」(財団法人日本少年保護協会『少年保護』、1938年1月号—5月号)。
- 58、 二村英巖「感化院家族舎の分化」(『感化教育』、19号、1931年)。
- 59、 二村英巖「保護少年の知能と学業成績及び血液型」(日本感化教育会『児童保護』、第4巻第1号、1934年)。
- 60、 尾瀬盛之助「愛知県下に於ける隣保館を巡りて」(京都府社会事業協会『社会時報』、第4巻第10号、1934年)。
- 61、 加藤清之助「豊ヶ岡可塑園の現状とわが抱負を語る」(日本少年保護協会『少年保護』、3月号、1938年)。
- 62、 上田眞津代「豊浦少年療養所を訪ねて」(日本少年保護協会『少年保護』、8月号、1938年)。
- 63、 特殊教育研究連盟『精神遅滞児教育の実際』、牧書店、(1939年)。
- 64、 半田市立成岩小学校『学業不振児の科学的診断とその指導』(1953年)。
- 65、 川本宇之介『ろう言語教育新講』(1954年)。
- 66、 被災学生を守る会『伊勢湾台風』(1960年)。
- 67、 小林良夫『豊浦医療少年院誌』(1973年)。
- 68、 青山大作『名古屋市の社会福祉—終戦時を中心として—』(1953年)。
- 69、 吉田宏岳「児童福祉施設の発達(愛知育児院史)」(中部社会事業短期大学人間関係研究所『中部社会事業』、第3号、pp.8-18、1956年)。
- 70、 吉川芳秋「司法保護の先覚者加藤清之助翁の追思碑」(名古屋郷土文化会『郷土文化』、第21巻第2号(通巻86号)、pp.29-31、1966年)。
- 71、 有坂徳子「愛知県における保育施設の発達」(愛知県立女子大学、愛知県立女子短期大学児童福祉学会『児童福祉研究』、第9号、pp.3-14、1966年)。
- 72、 昭和39年度児童福祉実習グループ「愛知県の児童福祉施設の状況」(愛知県立女子大学、愛知県立女子短期大学児童福祉学会『児童福祉研究』、第9号、pp.15-33、1966年)。
- 73、 三上孝基、吉田宏岳「愛知県社会事業史研究(その一)」(同朋大学同朋学会『同朋学報』、第18・19合併号、pp.182-229、1968年)。
- 74、 田中勝文「愛知の子守教育」(愛知県立大学『児童教育学科論集』、第2号、pp.42-49、1969年)。
- 75、 宇治谷義雄、近藤浩一郎、吉田宏岳「愛知県に於ける児童福祉施設の歴史—昭徳会発達の歴史を中心として—」(日本福祉大学研究所『年報』、第2号、1969年)。
- 76、 名古屋市立大学医学部神経精神医学教室『岸本鎌一教授、退職記念論文集』(1969年)。
- 77、 吉田宏岳、高司昌「愛知県社会事業史研究—とくに明治時代の歩みを中心として—」(同朋大学同朋学会『同朋大学論叢』、第24・25合併号、pp.368-397、1971年)。
- 78、 吉田宏岳、高司昌「愛知県社会事業史研究—とくに大正初期の歩みを中心として—」(同朋大学同朋学会『同朋大学論叢』、第26号、pp.87-103、1972年)。
- 79、 高橋悦子「愛知県救済協会の設立過程について」(愛知県立大学『愛知県立大学十周年記念論集』、pp.295-311、1975年)。

愛知県における児童問題史文献目録

- 80、高橋悦子「愛知県児童保護史年表Ⅰ—明治・大正期—」(愛知県立大学『児童教育学論集』、第9号、pp.7-35、1976年)。
- 81、竹内勇「昭和初期の愛知県の社会事業について」(同朋大学『同朋社会福祉』、第4号、pp.13-15、1976年)。
- 82、三上孝基「愛知県社会事業史管見(一)」(同朋大学『同朋社会福祉』、第7号、pp.65-81、1979年)。
- 83、三上孝基「愛知県社会事業史管見(二)」(同朋大学『同朋社会福祉』、第8号、pp.69-89、1980年)。
- 84、高橋悦子「愛知県児童保護史研究(3) —三河育児院について—」(愛知県立大学『児童教育学論集』、第13号、pp.67-77、1980年)。
- 85、永岡正己「愛知県社会事業協会と『共存』」(日本福祉大学『日本福祉大学研究所報』、第14号、pp.17-20、1980年)。
- 86、精神薄弱問題史研究会『人物でつづる精神薄弱教育史』、日本文化科学社(1980年)。
- 87、三上孝基「愛知県社会福祉史管見(後編)」(同朋大学『同朋社会福祉』、第9号、pp.47-67、1981年)。
- 88、社会福祉調査研究会『戦前日本の社会事業調査』、勁草書房(1983年)。
- 89、中田照子「戦時体制下の女性労働と保育—名古屋市中心として—」(名古屋市立女子短期大学『研究紀要』、第35号、pp.77-81、1985年)。
- 90、遠藤由美「戦後日本養護問題史研究その2—合宿教育所の設置過程—」(名古屋大学大学院教育学研究科教育学専攻『教育論叢』、第30号、pp.25-40、1987年)。
- 91、田代国次郎、菊池正治『日本社会福祉人物史(上)』、相川書房(1989年)。
- 92、長谷川真人「愛知県における養護施設の歴史—学校併設養護施設の変遷を中心において—」(愛知県立大学『児童教育学論集』、第23号、pp.59-69、1990年)。
- 93、小川英彦「杉田直樹の『治療教育』の思想(Ⅰ)」(精神薄弱問題史研究会『障害者問題史研究紀要』、第33号、pp.27-38、1990年)。
- 94、浦崎源次「名古屋市における『障害児保育』の現状と課題」(名古屋市立保育短期大学『研究紀要』、第29号、pp.103-126、1990年)。
- 95、高橋智、小川英彦「大正期における『劣等児』特別学級の成立—名古屋市の『個別学級』の事例検討—」(日本福祉大学『研究紀要』、第85号(第1分冊-福祉領域)、pp.183-215、1991年)。
- 96、小川英彦「愛知県における児童問題史研究—児童研究所の果たした役割を中心に—」(精神薄弱問題史研究会『障害者問題史研究紀要』、第36号、pp.35-44、1993年)。
- 97、小川英彦「戦後における精神薄弱児学級の成立—名古屋市の旭白壁小・菊井中・幅下小の検討—」(日本発達障害学会『発達障害研究』、第15巻第1号、pp.63-76、1993年)。
- 98、前田朋子「昭和初期名古屋聾学校における教員養成講習会—その講習内容と資格—」(日本特殊教育学会『特殊教育研究』、第34号第2号、pp.41-47、1996年)。
- 99、川崎純夫、森島慧「知的障害者と共に生きた川崎昂の教育実践とその思想」、野間教育研究所(1997年)。
- 100、川崎純夫、星野政明「川崎昂の教育実践と教育思想の研究(その1)」(日本社会福祉学会第46回全国大会『研究報告概要集』、p.242、1998年)。
- 101、小川英彦「愛知県における知的障害問題の成立に関する研究」(社会事業史学会『社会事業史研究』、pp.131-141、1998年)。
- 102、山崎由可里「杉田直樹の名古屋医科大学教授就任」(『名古屋大学史紀要』、第6号、pp.43-66、1998年)。
- 103、山崎由可里「八事少年寮開設に至る杉田直樹の治療教育思想」(日本特殊教育学会『特殊教育研究』、第37巻第1号、pp.11-20、1999年)。
- 104、長谷川真人『児童養護施設の子どもたちはいま』、三学出版(2000年)。
- 105、穴戸健夫、愛知県保育問題研究会史編集委員会『あしたの子ども—愛知の保育問題研究会の歩み—』、新読者社(2002年)。
- 106、清原みさ子、豊田和子、原友美、井深淳子『戦後保育の実際—昭和30年代はじめまでの名古屋市の幼稚園・保育所—』、新読書社(2003年)。
- 107、後藤陽夫「愛知県立精神病院初代院長児玉昌博士の生涯と業績」(精神医学史学会『精神医学史研究』、VOL.9-2、pp.95-108、2005年)。
- 108、西山茂、秦安雄、宇治谷義雄『福祉を築く—鈴木修学の信仰と福祉—』、中央法規(2005年)。
- 109、酒井教子「名古屋市における統合保育の歴史と課題」(名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』、第8号、pp.157-171、2007年)。

〈附記〉

文献を入手するにあたっては、大学附属図書館・名古屋市教育委員会や愛知県教育委員会・市町村の図書館(名古屋市と愛知県内)・新聞社・園や学校や施設・古書店・関係者のインタビューなどのご協力をいただいた。ここに厚く御礼申し上げたい。